

昨年末、6人（小学生2人を含む）を惨殺した罪人の死刑判決が控訴審で破棄された。制度導入から10年、裁判員裁判の判決を控訴審が覆す「破棄率」が上昇している。

人を殺せる人は沢山いる。憎悪に嫉妬、営利目的から無差別まで、動機はそれぞれだが、いかなる身勝手な罪人に対しても、死刑を望む市民判断は通用しないようだ。

主要メディアも、こういう時だけは、厳罰＝死刑を暗に支持するふりをするが、市民判断に乗っかっていただけだ。ローマ教皇の来日や、国連のお達しでもあれば、すぐに反対派に鞍替えするほど主体性はない。この世には善良な市民の想像も及ばない極悪人が沢山いる。

極悪人のおぞましい欲望を封じるには、厳罰と社会監視しかない。

「人権」などと能天気なことを言う人に限って、自身や身内の被害には実に過激な反応を示してしまう。戦争についても然り、普段は対岸の火事という意識しかないから「キレイごと」ばかりで、その本質から逃げようとする。

極悪人の恐怖を自分自身が目の当たりにしない限り、本質を直視することはないし、自身に起きた悲劇として共感する力も欠けている。

人の悼みを喜んで踏みにじる悪の権化のおぞましさに直接触れたことがないからだ。

「刑務所に永遠に入りたい。控訴はしません、バンザイ！」

新幹線の中で善良な人を「殺しきった」極悪人は、判決後、無表情にこう叫んだ。

極悪人に寄り添えますか？

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

刑務所に入りたいたいから無差別殺人を犯す人はこれまでもいたが、死刑を免れるために、殺す人数を決めていたクズは初めてだ。

TV番組では、タレントの藤田ニコルさんが「私なら死刑にする、無期懲役の場合もじわじわと苦しめたい」と憤り、みちよばさんも「納得できない」と死刑を肯定した。

事実、私のまわりでも、女性は100%「死刑が妥当」と冷静に即答する。

きつとこれまでの人生、一度は悪人のおぞましさを肌身で感じたことがあり、極悪人の恐怖を現実的に想像できるからに違いない。

人は罪深い。そして、罪深き人を裁けるのは天だけなのだろう。

しかし、人にはその罪を抑制し、多くの人が平穏に暮らせる社会秩序を保つ権利がある。

死刑を批判する国々も、裏では他国の領土で堂々と人を殺し、「裁判無用の死刑」が執行されている。それぞれの国の身勝手な理屈で、人の命が収奪されているのだ。

人権、多様性、環境問題…国際基準というのには常にダブルスタンダードだ。

そして、帝国の国益とグローバルビジネスが絡めば、日本のような国際批判に弱い正直な国が真っ先に損をする仕掛けが出来上がっている。

聖書の国に寄り添って、死刑をやめるのか？私は、自分の国の信念に寄り添いたい。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価 700円
Amazonにて販売中